



[kaminorippo.org](http://kaminorippo.org)

## 付録8a: 神殿を必要とする神の律法

このページは、エルサレムに神殿が存在していた時にのみ守ることが可能であった神の律法を探究するシリーズの一部です。

- [付録8a: 神殿を必要とする神の律法](#) (現在のページ)。
- [付録8b: いけにえ — なぜ今日それを守ることができないのか](#)
- [付録8c: 聖書の祭り — なぜ今日そのいずれも守ることができないのか](#)
- [付録8d: 清めの律法 — なぜ神殿なしでは守ることができないのか](#)
- [付録8e: 十分の一と初物 — なぜ今日それらを守ることができないのか](#)
- [付録8f: 聖餐 — イエスの最後の晚餐は過越であった](#)
- [付録8g: ナジル人と誓願の律法 — なぜ今日それらを守ることができないのか](#)
- [付録8h: 神殿に関わる部分的・象徴的な服従](#)
- [付録8i: 十字架と神殿](#)

### 序論

初めから、神はご自身の律法のある部分が、ただ一つの特定の場所——ご自身の名を置くために選ばれた神殿——でのみ行われるべきであることを定められました(申命記 12:5-6; 申命記 12:11)。イスラエルに与えられた多くの規定——いけにえ、供え物、清めの儀式、誓願、レビ系の祭司職の務め——は、物理的な祭壇、アロンの子孫である祭司、そして神殿が存在している間だけ機能した清浄の体系に依存していました。これらの戒めを、別の場所に移したり、新しい状況に合わせて適応させたり、象徴的な実践に置き換えたり、部分的に守ったりできると教えた預言者は一人もいません。イエスでさえ、そのようなことを教えられたことはありません。真の服従は常に単純でした。すなわち、神が命じられたとおりに正確に行うか、さもなければ従っていないかのどちらかです。「あなたがたは、わたしが命じることに付け加えてはならず、また削ってもならない。ただ、あなたがたに命じるあなたの神、主の命令を守りなさい」(申命記 4:2。申命記 12:32; ヨシュア 1:7 参照)。

### 状況の変化

西暦70年にエルサレムの神殿が破壊された後、状況は変わりました。それは律法が変わったからではありません。神の律法は完全であり、永遠に変わらないからです。変わったのは、これら特定の戒めを果たすために神が要求された要素が、もはや存在しなくなったという事実です。神殿も、祭壇も、聖別された祭司も、赤い雌牛の灰も存在しない以上、モーセ、ヨシュア、ダビデ、ヒゼキヤ、エズラ、そして使徒たちの世代が忠実に守ってきたことを、文字どおり再現することは不可能です。問題は意志の欠如ではありません。不可能なのです。神ご自身がその扉を閉じられました(哀歌 2:6-7)。そして、人間には別の方法を発明する権威はありません。



西暦70年に第二神殿が破壊された様子を描いたフランチェスコ・ハイエズの絵画

## 作り出された、または象徴的な服従という誤り

それにもかかわらず、イスラエルの生活様式の要素を回復しようとする多くのメシア派運動やグループは、これらの律法の縮小版、象徴的、あるいは再発明された形を作り出してきました。彼らは、トーラーに命じられていない祝祭を行います。かつてはいけにえ、祭司職、聖なる祭壇を必要としたものの代わりに、「祭りのリハーサル」や「預言的な祝宴」を発明します。そして、それらの人間的創作物を「服従」と呼びます。しかし実際には、それらは聖書的な言葉で飾られた人間の発明にすぎません。動機が誠実に見えることがあっても、真理は変わりません。神が求められたすべての詳細が定められている以上、部分的な服従というものは存在しないのです。



嘆きの壁としても知られる西の壁は、西暦70年にローマ人によって破壊されたエルサレム神殿の残骸です。

## 神は、神ご自身が禁じられたことを行おうとする私たちの試みを受け入れられるのか

今日広まっている最も有害な考えの一つは、神殿に依存していた戒めについて、私たちが「最善を尽くして」守ろうとすれば神は喜ばれる、という考えです。まるで神殿の破壊が神の御心に反して起こり、私たちが象徴的な行為によって神を慰めることができるかのようです。これは重大な誤解です。神は私たちの即興を必要としておられません。象徴的な代用品を必要としてもおられません。そして、正確な指示を無視して自分たちの服従の形を作り出すことによって、神が栄誉を受けられることはありません。もし神が、特定の律法を、ご自身が選ばれた場所で、ご自身が任命された祭司によって、ご自身が聖別された祭壇の上で行うよう命じられたのであれば(申命記 12:13-14)、それを別の場所や別の形で行おうすることは、信心ではありません。それは不服従です。神殿は偶然に取り除かれたのではありません。神のご決定によって取り除かれたのです。神ご自身が停止されたものを再現できるかのように振る舞うことは、忠実さではなく、思い上がりです。「主は、主の御声に聞き従うことと同じほど、全焼のいけにえやいけにえを喜ばれるだろうか。見よ、従うことには、いけにえにまさっている」(サムエル記第一 15:22)。

## このシリーズの目的

このシリーズの目的は、この真理を明確にすることにあります。私たちは、いかなる戒めも退けていません。神殿の重要性を軽んじているのでもありません。守る律法と無視する律法を選別しているのでもありません。私たちの目標は、律法が実際に何を命じていたのか、これらの規定が過去にどのように守られていたのか、そしてなぜ今日それらを守ることができないのかを、正確に示すことです。私たちは、付け加えも、改変も、人間的創作もなく、聖書に忠実であり続けます(申命記 4:2; 申命記 12:32; ヨシュア 1:7)。読者は皆、今日の

不可能性が反逆ではなく、神ご自身が要求された構造が存在しないという事実にすぎないことを理解するでしょう。

それでは、基礎から始めましょう。すなわち、律法が実際に命じていたこと、そしてなぜこの服従が神殿の存在の中にのみ可能であったのか、という点です。